



JANSI

ニュースレター

2013年 第1四半期 Vol.1

お問合せ先

原子力安全推進協会 業務部

広報・IT管理グループ

TEL : 03-5418-9312

FAX : 03-5440-3606

e-mail:newsletter@genanshin.jp

公開HP:<http://www.genanshin.jp/>

本ニュースレターは、当協会と接触のあったマスコミ関係者の方々に対して、当協会の活動状況をお知らせするために作っています。今後、季刊で発行していく予定ですので、よろしくお願ひいたします。

代表からのご挨拶 松浦 祥次郎



この度、『一般社団法人 原子力安全推進協会』の代表に就任いたしました松浦です。

当協会は、平成24年11月15日に我が国の原子力事業者が追求する世界最高水準の安全確保への取組を客観的に評価のうえ、提言あるいは勧告し、安全確保活動を支援することを目的として、旧『日本原子力技術協会』を改編して設立致しました。

原子力が社会にもたらす利益を、安全確保の不全で阻害してはなりません。まして、社会に災害を及ぼすことは許されません。福島第一事故の発生以来、我々は改めて深く心に刻まねばならないと決意しております。

私は、原子力の安全確保のためには、安全を追求する『心・技・体』が重要であると考えております。すなわち、『心』は、安全の価値を明確にかつ深く認識し、それを守り抜こうとする強い決意であり、『技』は、安全確保を実現する知識・経験・技術・施設の質の高さ・確かさであり、

『体』は、しなやかで強靭な組織とその能力、です。

当協会は、原子力事業者の安全確保の『心・技・体』を、より高く、より強く、より強くするために、たゆむことなく努力する独立したプロフェッショナル組織として活動致します。

また、活動に当たっては、以下の事項を重視することで、実効性を高めてまいります。

①技術評価の独立性を確保し、評価結果に基づく提言・勧告が実際に活用されているかについても注視してまいります。

②安全文化を浸透させるためには、事業者トップのコミットメントは非常に重要です。旧日本原子力技術協会がこれまで蓄積してきた活動成果を活用してまいります。

③独善的にならない様、海外の機関・専門家との連携を進めてまいります。

④まず、最重要課題として、過酷事故の撲滅に取り組んでまいります。

今後、原子力の安全確保のため全力で活動してまいりますので、ご理解をいただきますとともに、ご指導・ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



原子力安全推進協会のミッションと活動のポイント

原子力発電所の安全性向上のためには、事業者自らが、自主的かつ継続的に安全性向上に取り組み、世界最高水準の安全性を不斷に追求することが必要です。また、この安全性向上活動が、事業者の独りよがりにならず、絶えずこれを別の立場で評価する仕組みがなくてはなりません。

原子力安全推進協会は、技術評価において事業者の意向に影響されない独立性の仕組み・体制を構築し、事業者に対して客観的に評価、提言・勧告を行うとともに、それに基づき事業者の原子力安全性向上活動の支援を行うことで、我が国全体の原子力安全レベルを引き上げていきます。

仕組み

ミッション：日本の原子力産業界における、世界最高水準の安全性の追求 ～たゆまぬ最高水準（Excellence）の追求～

① 技術評価の独立性

◆ 技術評価の独立性確保

技術評価や提言・勧告の判断は原子力安全推進協会代表の専決事項とし、事業者の意向に左右されない技術評価を行います。

◆ 提言案の策定

② 事業者社長のコミットメント

◆ 事業者社長会議の設置

事業者の全社長が出席する「事業者社長会議」において、原子力安全推進協会代表から直接、社長へ提言・勧告を行い、改善策実行の約束を引き出す仕組みとします。また、提言・勧告を受けた社長だけでなく、他の社長も課題を共有し、お互い切磋琢磨することで業界全体としてのレベルアップを図ります。

③ 海外機関との連携

◆ 技術評価グループ

過酷事故や確率論的安全評価等の各分野をリードする海外の専門家を迎える、事業者に対する提言・勧告のレビューを受けます。

原子力安全推進協会

◆ 日常業務における海外連携

安全性向上活動、ビアレビュー等の業務について、海外の技術者を迎える、意見交換します。

経営に関する意見交換

◆ 国際アドバイザリーグループ

WANO^(*)等の海外機関・海外事業者の最高責任者クラスと、原子力安全性向上のために組織の経営全般や必要な連携分野等についての意見交換し、価値観の共有を図ります。

^(*)WANO: 世界原子力発電事業者協会

取り組み

安全性向上対策の評価と提言・勧告および支援

国内外の最新情報を収集・分析し、各事業者がエクセルンスを目指して取り組むよう、原子力安全レベルを引き上げていくための提言を行います。

緊急の課題としては、シビアクシデント（設計基準を超え重大な炉心損傷を起こす事故）対応を最優先で進めることとしますが、今後は設計基準を超えない事象にも取組の範囲を拡大していく予定です。

原子力施設の評価と提言・勧告および支援

原子力施設の運営状況を定期的に行うビアレビューやテー別レビューにより確認し、最慢良事例を踏まえて発電所等の運営状況や設備の状態、安全文化の健全性や改善への取り組みを評価し、それぞれのレベルを引き上げるための提言、支援を行います。

また、発電所に対し連絡代表者を定期的に派遣し、発電所幹部とのコミュニケーション、他発電所での良好事例の紹介などを通じて発電所に対する支援を行いレベルアップを図ります。

その他関連業務の推進

左記を支えるための諸活動（トラブル情報分析、規格基準作成、人材育成等）を行います。

- 開催趣旨：新組織の設立に当たり、国際連携の一環として、海外機関、海外組織のリーダーを招き、原子力安全向上に向けた各國、各機関の経験を共有し、直接意見交換する。
- 開催日時：平成24年12月18日(火) 9時30～17時10分
- 場 所：日本科学未来館7階 みらいCANホール
- 参 加 者：269名(講演者11名、原安進(含むスタッフ)42名および報道8名を含む)

開会挨拶 松浦 祥次郎 原子力安全推進協会(JANSI)代表

来賓挨拶 高原 一郎 資源エネルギー庁長官 八木 誠 電気事業連合会会長

基調講演-1 新組織設立にあたってのメッセージ

ウィリアム D. マグワード、IV 米国NRC委員

基調講演-2 各国、世界での原子力利用についての取組み、日本原子力産業界へのメッセージ

ピーター B. ライオンズ 米国DOE次官補

ホアン カルロス レンティッホ IAEA原子燃料サイクル、廃棄物技術部長

ベルナール ピゴ フランス CEA長官

特別講演 過去の原子力事故を受けた海外各組織の取組みの経験の共有

ローレン ストリッカ WANO議長

ウィリアム E. ウエブスター、Jr. INPOシニアバイスプレジデント

パネルディスカッション 事業者の原子力安全向上を支援するための各産業界組織の取組み

コーディネータ：岡本 孝司 東京大学大学院教授

講演：ニール M. ウィルムスハースト EPRI副社長兼CNO

松浦 祥次郎 原子力安全推進協会(JANSI)代表

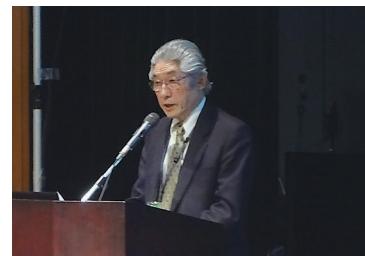
パネリスト：ローレン ストリッカ WANO議長

ウィリアム E. ウエブスター、Jr. INPOシニアバイスプレジデント

ニール M. ウィルムスハースト EPRI副社長兼CNO

松浦 祥次郎 原子力安全推進協会(JANSI)代表

閉会挨拶 藤江 孝夫 原子力安全推進協会(JANSI)理事長



参加者の意見・感想 [聞] [き] [取] [り] [結] [果]

- ビッグネームが並んでいて、貴重な話を伺うことができ、大変勉強になりました。原安進の重責を改めて、認識させて頂きました。規制委員会との連携が重要とも、強く思いましたので、私からも、しっかり話をしに行こうと思っております。(資源エネルギー庁)
- 大変、面白かったと当社の参加者からも好評でした。特に、INPOの方の講演は大変、示唆に富む内容でした。(電力)
- 私にとって、大変有意義なシンポジウムでした。INPOの役割などアメリカの考え方方がよくわかり、JANSIの今後の方向などがわかりました。(運営諮詢委員)
- 大変好評だという噂を聞いたので是非資料を入手したい。詳しい内容をHPに載せて欲しい。(会員)
- 途中で失礼しようと思ったが、内容が濃いので自分が熱くなり、閉会挨拶まで聞いた。(会員社長)

東京電力(株)福島第二原子力発電所 東北地方太平洋沖地震及び津波に対する対応状況の調査及び抽出される教訓について(提言) -平成24年12月-

第三者的立場から、津波に襲われながらも事態を収束に導くことができた福島第二原子力発電所での東日本大震災被災時の対応状況を技術的に検証し、原子力発電所のより一層の事故対応能力を高め、安全性の向上に資することを願い教訓をまとめました。

本報告書では、事象の推移や対応に関しては大きな推移が分かるように概要をまとめ、また、教訓が含まれているようなグッドプラクティスを拾い上げるように記載しました。教訓をまとめるに際しては、事故対応の実際の状況等を基に、どの程度の準備をしておけばいいのかより具体性のある提言となるように心がけて整理しました。

今後、国内外の原子力発電所で事故に対する対策を検討していく際に、本報告書の教訓が活用されることを望んでいます。

技 術 解 説

使用済燃料の崩壊熱と種々の貯蔵方法について

①崩壊熱:核分裂で発生した核分裂生成物は不安定で、ベータ線やガンマ線などの放射線を放出することで、安定な物質に変化します。この放射線のエネルギーが崩壊熱です。原子炉停止直後の崩壊熱は、運転中の約7%ありますが、時間経過とともに徐々に減衰します。

②使用済燃料プール:水には、高い除熱能力和放射線遮蔽能力があります。取り出したばかりの使用済燃料は崩壊熱発生量が大きいため、一定の間、使用済燃料プール内で、不純物管理した水で冷却し、崩壊熱の減衰を待ちます。

その一方、使用済燃料プール水は、冷却器等を強制循環させ除熱する必要があります。

③乾式キャスク貯蔵:崩壊熱が減衰すれば、乾式キャスクで保管することが可能ですが、一般的には、

・使用済燃料を内容器に収納後、頑丈な金属製又はコンクリート製キャスクに(2重に)収納すること、
・自然冷却であるため、使用済燃料プールの様な強制循環が必要ないこと、

・使用済燃料の収納状況を常に監視していること、等が特徴であり、安全やセキュリティの確保上、優れた特徴を有しています。

海外には、乾式キャスクを屋外保管している例や、変わったところとしてはコンクリート製サイロに複数の内容器を収納するサイロ方式や我が国の高レベル廃棄物貯蔵施設に似たボールト貯蔵方式もあります。